
Bitter and Sweet ～日常の風景～

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bitter and Sweet ～日常の風景～

【Nコード】

N1979G

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

高佐のSSラブストーリー集です。『日常の風景』をテーマにしたふたりの恋物語をどうぞ！

1 . その可愛いさに、苦笑（前書き）

深夜の警視庁で高木が佐藤を怒らせた訳とは？

1・その可愛いさに、苦笑

人影も疎らな深夜の捜査1課。

「ちよつと。何よコレ。」

頭上で低く唸る声がして、高木は書いていた書類から顔を上げる。

目の前で仁王立ちになった佐藤の顔には表情が無い。呆れているのか。怒っているのか。それとも嘆いているのか。なんとも読み取れそうな冷め切った双眼がこちらを見下ろしていた。

高木は何故佐藤がそんな顔をしているのか判らず、へらりと愛想笑いを浮かべる。

「そんな顔したってごまかされないわよ。」

怒気を含んだ声ですごむ佐藤に背筋が凍りつきそんな程の恐怖を覚える。

頬が引き攣りそうになるのを必死で堪え、わざとらしい笑みを浮かべたまま高木は問い掛ける。

「な、何でしょう？」

それには答えず佐藤は見ると言わんばかりに高木の手元に視線を落とす。つられて高木も己の手元を見る。

あ……

もしかして。

「欲しかった、です？」

悪戯が見つかったしまった子供のように、上目使いで怖ず怖ずと尋ねる。

相変わらず無表情な佐藤がこくと頷いた。

高木は俯きがちに大きな溜め息を吐き、肩を竦める。

「全部、食べちゃいました。」

すみません。と高木が謝るより先に佐藤の容赦無い愚痴が降ってくる。

「どーして独りで全部食べちゃうのよつ。馬鹿つ。」

殴られるかもしれない、と思わず身構える高木を残し、くるりと踵を返すと佐藤は部屋を出て行く。慌てて高木も後を追う。

「佐藤さん。ちょっと。佐藤さんっ。」

呼び掛ける高木を無視して佐藤はずんずん廊下を歩いて行く。

「あのー、さとーさん。」

何度目かの呼び掛けでようやく佐藤は足を止めた。

「……………さいよ。」

ぼそりと呟いた佐藤の言葉は語尾しか聞き取れない。

「はい？」

高木がやや上擦った声で聞き返す。

佐藤は振り向きもせずに今度はきっぱりと言った。

「今夜は奢りなさいよ。」

高木は一瞬きよんとして、直ぐに相好を崩す。

「分かりました。今日はとことん付き合いますよ。」

高木の返事に佐藤は満足そうな顔で振り向くと、高木の横を摺り抜け鼻歌混じりに捜査1課へと戻って行く。

高木はその後ろ姿を見送りながら苦笑混じりにぼつりと呟いた。

まあ、そういうところが可愛いんですけどね。

1・その可愛いさに、苦笑（後書き）

ふと思い付いたネタをSSという形にしてみました（笑）そして無謀にもSS集という形で連載してみる事にしました。今回も相変わらず高木くんは佐藤さんに振り回されっぱなしですね・・・ハイ。でもやっぱりこういうのが一番高佐らしいかも。最後の高木くんの台詞にくすつと笑って頂けたら良いかな、なんて思います。それにしても高木くんが一人で食べてしまったモノって何だったんだろう・・・？

2・悪夢の後で（前書き）

ちよつとシリアス。大人な雰囲気の高佐です。でもラブ度はかなり高め。

2・悪夢の後で

最近めつきり夢なんて見なくなった。

それでも酷く疲れている時や後味の悪い事件に遭遇した後は決まって夢を見る。

悪夢。

内容までは覚えていない。でも、出て来る人物はいつも同じで。

夢の中の私は必死に手を伸ばす。無我夢中で彼を捕まえようとする。けれど彼はするりとその手を摺り抜けて。

消えてしまう。

まるで指の隙間から零れ落ちる一握の砂のように。

どうして？私を独りにしないって約束したじゃない！！

息苦しくてはつと目を覚ます。

額には汗が滲み、頬には涙が伝う。

ゆっくりと起き上がり、大きく息を吸う。きりきりと痛む肺に無理矢理酸素を送り込んだ。

まただ。

佐藤はまだ覚醒していない頭でただぼんやりと一点を見つめる。思い出すことすら恐ろしくて。知らず知らずのうちにまたひとつ涙が零れ落ちた。

ふと気付いて後ろを振り返る。そこには無防備な寝顔があった。もうとっくに二十歳を過ぎているというのに愛らしささえ覚える愛お

しい寝顔。佐藤はそつと手を伸ばす。その手は規則正しく呼吸を刻みながら、安心しきった顔で眠る最愛の男の頬に触れた。

あつたかい。

佐藤はほつと安堵の息をつく。

起こしてしまわぬよう、そつとその髪を梳く。込み上げる愛おしさが雫となってとめどなく佐藤の頬を滑り落ちた。

「うんん・・・」

微かな声を漏らし、ぴくりと高木の眉が動く。僅かに目を開け佐藤の姿を認めると、口元に微笑が浮かぶ。もぞもぞと手を伸ばして頬を伝う雫を拭うとその手はぐいっつと佐藤を引き寄せた。微かに唇が触れ、そのまま広い胸に抱きしめられる。

居ますよ。此処に。

少し掠れた優しい声にこくと頷いて、佐藤は瞳を閉じた。とくんとくんと正確にリズムを刻む鼓動が耳に心地いい。

此処にいるね。

次第に意識が遠退いていく。唇に微笑を残したまま、佐藤は深い眠りに落ちた。

2・悪夢の後で（後書き）

今回のお話は佐藤さんが主役！高木くんがほとんど出てこないうえに、ちよつと暗めの話だったにもかかわらず、かなりラブ度の高い話になったかなあと思います。こういう高佐もスキです。個人的には。大人の雰囲気上手く書けると良いのですが。佐藤さんが見る悪夢について、ですが。内容は多分高木くんと付き合う以前とは違っている筈です。そこに出て来る彼も間違い無く変わっています。そして、佐藤さんがその辺の事を話さなくても。例えば寝ぼけていても（？）瞬時に気付いてその想いを受け止めてあげられる高木くん。ちよつとかつこよすぎでしょうか（苦笑）

3・サクラマイチル（前書き）

佐藤さんを想う高木くんの独り語り。散文詩風で何の面白みもない文章です。それでも良いと思われる方はどうぞ。

3・サクラマイチル

4月某日。

聞き込みの合間に立ち寄った公園で、満開の桜にどちらともなくふと足を止めて。

束の間の休息。

眩しそうに目を細めて見上げるあなたの横顔がとても綺麗で。
オレはただその横顔に見とれた。

その時。

突然オレたちの間に強い風が吹き抜けて。

「綺麗……」

ぽつりとあなたが呟いた。

目の前は一面の
ウスベニノアラシ

あ……

思わず手を伸ばしたオレの目の前で、黒目がちな瞳をまあるく見開いたあなたが振り返る。

「どうしたの？」

尋ねるあなたの声が余りにも優しくかったから。
思わず泣きそうになる。

慌てて作った笑顔は不自然に引き攣って。

行き場の無い手が宙をさ迷う。

あなたが消えてしまいそうだったから。

あなたがオレの前から消えてしまふんじゃないかと思ったから。

そんな事を言ったらあなたはちょっと困った顔をして直ぐに呆れたような顔で馬鹿ねと笑うだろう。

どんな時も無条件にオレを信じてくれるあなただから。

分かっているつもりなんだけど。

自信なんかなくて。

ふとした拍子に不安が押し寄せる。

その波に飲み込まれそうになる。

俯いて黙りこくってしまったオレをあなたは不思議そうに覗き込んで。

穏やかにふつと微笑んだ。

ぽんぽん

まるで小さな子供にするようにオレの頭をそつと撫でる。

「大丈夫よ。」

オレが何も言わなくても。

あなたはオレの全てを理解してしまう。

それが堪らなく嬉しくて。

だけど堪らなく悲しくて。

「オレなんかでいいんですか？」

ずっと抱き続けている疑問。

呟いた声はざわめく風の音に力無く掻き消えた。

ふわり

柔らかな温もりに包まれて。

心がじんわり温かくなる。

背中に回された腕が、ぎゅうつと強くオレを抱きしめた。

「涉くんじゃなきゃ、ヤダ。」

あなたの声のはつきりと響いて。

オレは心からあなたを愛おしいと思った。

「涉くんがいいの。」

胸の中で呟くあなたが消えてしまわないように。
強く強く抱きしめる。

「愛してる。」

小さく囁いて。

腕の中にある温もりを確かめる。

「私も。愛してるわ。」

あなたが陽だまりのような笑顔で包み込んでくれるから。
悩んでいる事が馬鹿馬鹿しくなる。

結局のところオレにはあなたしかいなくて。
オレはきつとあなたには敵わない。
だけど。

あなたを愛おしいと思う気持ちだけは。
それだけは絶対誰にも負けはしないから。

「そろそろ行こうか？」

ゆるゆると腕を解いてあなたが言う。

小さく頷いて。

先に歩き始めたあなたの後ろ姿を追いかける。

頭上の桜が静かに揺れて、はらはらと舞い落ちた。

3・サクラマイチル（後書き）

前回の『悪夢の後で』で高木くんに対する佐藤さんの思いみたいなモノを書いたので、今回は高木くんの佐藤さんに対する思いを書いてみようかと。初めて散文詩風に（あくまでも『風』ですが）書いてみました。何の面白みも無い淡々とした文章ですが、高木くんの胸に秘めた静かだけど強い想いみたいなモノが表現できるかなあと、思ってこういう手法にしてみたのですが。いかがでしょうか？

4・働く手（前書き）

佐藤さんの独り語り。ほのぼの高佐劇場をどうぞ！

4・働く手

一通り書類を書き終えた私は大きくひとつ息を吐く。何気なく隣の席に目を遣ると、難しい顔をして書類を睨み付ける男が一人。

報告書一枚書くだけなのに、何でそんな険しい顔してんのよ。

少々呆れながら心の中で呟いて、笑ってる彼も可愛くて良いけど、こういう顔も良いなあ、などところどころ思う。すっかり手持ち無沙汰になった私は頬杖を付き、ぼんやりと隣席の様子を伺い見る。先程まで眉をしかめ俯きがちに首を捻っていた彼が、はっと顔を上げ目の前に積み上げた捜査資料を漁り始めたその時。

「うわあつ。」

机上でそれは雪崩を起こし、彼は短い嘆息を吐いた。

「つたく。何やってんだか。」

ここまでくると、もう呆れるのを通り越して何だか可笑しくなってくる。無意識の内にくすりと笑みが零れた。それに気付いた彼が怪訝な顔で振り返る。

「何すか？」

「よっぽど疲れているのか尋ねる声には全く力が無い。」

「別に。」

短く答えて視線を逸らすと、取り繕うように手にしていたボールペンの背を何度となくノックする。彼はちらりと不満げな顔を覗かせたものの、直ぐに書いていた書類に視線を落とす。

「佐藤さん、もう終わったんすか？」

休み無く手を動かしながら彼が尋ねる。

「んー？あともう少し。」

曖昧な返事を返しながらちらりと横目で隣を見遣る。彼は相変わらず書類とにらめっこしながら机上の資料と格闘し、黙々と手を動かしていた。

長くて綺麗な指。

再び頬杖をついてしげしげとその手を見つめる。すんなりと伸びた指の動きを目で追う。それにしても。

良く働く手ねえ……

先程から世話しなく動き回るその手に感心にも似た思いが沸き上がる。

「どうかしました？」

先程まで一心不乱に書類に向かっていた彼が不意に顔を上げて振り返る。

「さっきからずっとニヤニヤして。何か良い事でもあったんすか？」

私の顔なんてほとんど見て無かった癖に、何で知ってるのよ。

心の中でさらりと悪態をついてから、

「んー、別に。良く働く手だなあと思つて。」

素っ気なく答える私に彼は微かな苦笑を浮かべる。程なくしてきよるきよると辺りを見回しこちらを気にする人影が無い事を確認すると、彼は不意に手を伸ばし、くしゃくしゃと私の頭を撫でた。

「何よ？」

上目使いで睨み付ける私の頭に手を乗せたまま、彼は悪びれる事なく笑顔を返す。

「休憩ですよ。休憩。」

その屈託のない少年のような笑顔にどきりと鼓動が跳ねる。きつと耳まで真っ赤になっているに違いないと私は思った。

もうっ。卑怯なヤツ。

思いつきり毒づいてみるものの、その笑顔には勝てそうにない。

「その顔、ずるい。」

唇を尖らせてぽつりと呟く。

私とその顔に弱いつて知ってる癖に。

「はいはい。」

彼はにこにこ笑いながら手を除ける。何だかんだ言って一枚上手な彼の態度が何だか悔しくもあり、嬉しくもある。

「これ、書き終えたら一緒に帰りましょうね。」

無邪気な笑顔を向けられて、

「うん。」

ついつい素直に頷いてしまう。それを見て彼が嬉しそうに再び私の頭を撫でた。思わず笑みが零れる。

働き者のあなたの手も、その笑顔も大好きだから。

4・働く手（後書き）

佐藤さんが高木君にみとれる（？）シーンが無性に書きたくて、書いてみたらこんな感じになりました。正直あんまりみとれて無いような気がします（苦笑）佐藤さんの意地っ張りなところと、キュートなところが表現出来たら良し！ということではf^_^| ^.^;（表現出来てるのかどうかもアヤシイですけどね・・・）

番外編 フタリダケノセカイ？（前書き）

高佐。なんだけど千葉。今回は千葉目線です。軽い気持ちで読み流していただければよろしいかと。ちなみにこのお話での千葉と高木の関係は原作設定に準じております。

番外編 フタリダケノセカイ？

狭い捜査車輛の後部座席で千葉は大きな体をこれでもかと言わんばかりに縮こめる。その車内ではハンドルを握る高木が珍しく荒れていた。助手席に座る佐藤を相手にさつきからいちいち口答えをしたり、何度となく嘆息を吐いたり。

「ねえ。さつきから一体何なのよ？」

佐藤の口調も次第に荒くなり、車内はますます険悪なムードに包まれていく。

恐らく原因はさつきのアレだな・・・

千葉は先程起こった出来事を頭の中でリプレイする。

それは聞き込みで訪れた某大学の研究室での事。

男ばかり5人のゼミ生達が口々に佐藤を口説こうとしたのだ。当たり障りのない言葉ではぐらかす佐藤に学生達は次第にムキになり、しつこく迫り始める。佐藤の恋人である高木は当然面白くない。佐藤の言動にいちいち盛り上がる学生達とは対比的に、不快感をあらわにしながらも黙って堪えている高木が千葉には不憫に思えて仕方なかった。

「言いたい事があるんだっいたらはつきり言いなさいよね。」

車内では相変わらずむすつとした顔で佐藤が高木を睨みつけている。

さつきの研究室での一件が高木を不機嫌にさせた原因なんですよ。

高木の代わりに言えるものなら言ってやりたいところだが、生憎千葉にそんな度胸は無い。

「佐藤さんはモテますからね。今のうちにオレなんかより将来有望

な男に乗り換えた方がいいんじゃないですか。」

佐藤の問いに高木が膨れっ面で答える。

「何よそれ。男のヤキモチなんてみつともないわよ。」

佐藤は呆れたように吐き捨てて、ぷいっとそっぽを向く。

「みつともなくてすみませんね。」

対する高木もムツとした顔で吐き捨てた。

これじゃあ泥仕合だな……

千葉は二人に気付かれないよう静かに溜め息を吐き出した。しかし次の瞬間、佐藤がぼつりと呟いた言葉に千葉は驚愕する。

「高木君だけだから。」

先程までの刺のある言い方とは違い、包み込むように優しく佐藤は言う。その言葉に千葉の方が思わずドキドキしてしまう。

「だからヤキモチなんて妬く必要のないのよ。解った？」

普段の凜とした彼女からは想像もつかないような柔らかい声で佐藤が呟く。乙女のような微笑みさえ浮かべて。

「はいっ。オレも佐藤さんだけですから。」

高木がぱあっと顔を綻ばせてそれに答える。後部座席で赤くなりながらそのやり取りを見ていた千葉はふと我に返った。

もしかして俺、忘れられてる？

思わず苦笑を浮かべた千葉は、遠慮がちに小さくひとつ咳をした。

番外編 フタリダケノセカイ？（後書き）

今回は千葉目線。という事で番外編。原作でも良くある『周りの事はお構いなしに二人きりの世界を展開する高佐』と『その被害（？）を被る千葉』という構図で書いてみました。で、今回のテーマは『ヤキモチを妬く高木』と『口喧嘩する高佐』の2本立て。はつきり言ってギャグです・・・高木くんって佐藤さんに対してこんな口の聞き方するかあ？とか、佐藤さんが学生の口説きにそんな対応するかあ？等と書いてる自分が思ったりもしますが（↑ダメやん！）深く考えず軽〜く読み流して笑ってやっていただけたら幸いです（汗）

番外編 おまけ（前書き）

番外編『フタリダケノセカイ?』のその後です。相変わらずギャグです・・・お暇な方はどうぞ

番外編 おまけ

「ちっ、千葉っ。」

「千葉くんっ。」

ほぼ同時に二人が素っ頓狂な声を上げる。一瞬車が蛇行したように感じたのは気のせい。佐藤がたちまち頬を薔薇色に染めて恥ずかしそうに俯く。車内に気まずい空気が流れた。

マズかったかな……

いや、もとはといえば気を利かせて後部座席に陣取った千葉の存在をすっかり忘れていた高木と佐藤が悪いのだから、千葉が気を使う必要も無いのかもしれないが。

「お、お前、いつからソコに居た？」

動揺した高木が何を血迷ったか訳の解らない疑問をぶつけてくる。

いつからって……

本庁を出た時からずっと一緒だったろ。と言いたいのをぐっと堪えて、引き攣った笑みを浮かべ答える。

「い、今さっき……」

んなわけねーじゃん。

心の中で思いつきりつつこんで、千葉は小さく肩を竦めた。重苦しい沈黙が車内を包む。赤信号で車を停めた高木が、見た事も無いような形相で不意にくると振り返った。

「じゃあさっきの話は聞いて無かったよな？」

その双眼が、聞いて無いと言え、と訴えかけてくる。

「あ、ああ。」

高木の勢いに気圧されて、思わず頷く。相変わらず佐藤は真っ赤な顔でじつと下をむいたままだ。一瞬の間があって高木が引き攣った顔を幾分綻ばせてぽつりと呟く。

「よし。じゃあ昼飯はオレの奢りだ。好きなモン食っていいぞ。」

高木の言葉にたちまち千葉の頬が緩む。

口止め料は高くつくぜ。

千葉の頭の中は昼食のメニューでいっぱいになった。

番外編 おまけ（後書き）

番外編を書いた後で、さらっと書き流してみました。呆れつつも笑っていただけならそれでオッケーかと。しょーもないお話を最後まで読んでくださり有難うございました！

5 ・言葉はなくても（前書き）

少し早いですが、ホワイトデー企画の高佐です。ちょっとコミカルで何気にラブい高佐をご賞味あれ！

5・言葉はなくても

「おはようございます。」

いつものように捜査1課の扉を開けると、皆がいつせいに振り返る。口々に挨拶を返す男達の笑顔が心なしかそわそわしていることに首を捻りながら自分の机に視線を向けた瞬間、佐藤はその意味を思い知った。佐藤の机の上には山積みの捜査資料、ではなく、色採りどりのプレゼントが今にも崩れ落ちそうなほど高く積み上げられている。今日は3月14日。俗に言うホワイトデーである。その事をすっかり忘れていた佐藤は小さく溜め息をついた。

「たく。毎年毎年。一体どーやって持って帰ってたのよ。コレ。」

プレゼントの山を前にア然と立ち尽くす佐藤に、見かねた高木が遠慮がちに隣の席から声をかける。

「佐藤さん。あの、袋が無いんなら僕、持ってますけど……」
声のした方に不機嫌な顔で振り返り無言で手を差し出すと、弾かれたように高木が机の下から大きな紙袋を引っ張り出してくる。

「高木くん。あなたも手伝いなさい？」

命令口調で詰め寄る佐藤に高木は引き攣った笑みを浮かべて首を横に振る。

「だ、駄目です。そんな事したら僕、殺されちゃいます。」

何でそんな事くらいで殺されなきゃなんないのよ。

心の中で思いつきり突っ込んでから、佐藤は机上の山を崩さないよう上の包みから順に袋の中に放り込んでいく。

1課の中には妙な決まり事があるようで、ホワイトデーのお返しが合同で返って来ることは無い。しかも、直接佐藤にお返しを渡して

来るのは警部以上の人間ばかりで、それ以外の者はこうして佐藤の机の上にお返しの商品を置いていくのだ。その為毎年ホワイトデーには佐藤の机の上に小高いプレゼントの山ができる。

お返しなんて要らないのに、みんな義理堅いというか何と言うか。

余りの数の多さに佐藤は再び小さな溜め息をついた

「ったくもうつ。気持ちには有り難いけど、これじゃあ仕事にならないじゃない。」

恐らく去年も呟いたのであろう台詞を今年もぶつぶつ口の中で呟きながら、佐藤は次々にそれらを紙袋の中に押し込んでいく。

あ・・・

慌ただしく動いていた手がぴたりと止まる。カラフルで可愛いプレゼントの山の中で、そのシンプルでセンスの良いラッピングは一際佐藤の目を引いた。しかも、包み紙には佐藤の大好きなとある洋菓子店の名前が書いてある。

これ・・・

確信してちらりと隣を見遣ると、嬉しそうに高木がこちらを見つめている。

やっぱりね。

思わず笑みが零れる。佐藤は声には出さずに唇だけ動かしただけ。

アリガトウ

みるみるうちに高木が相好を崩す。その笑顔に佐藤は心の中で呟いた。

涉くん。やっぱりあなたは私にとって特別な存在みたい。いろんな意味で、ね。

5 ・言葉はなくても（後書き）

最後の佐藤さんの意味深な台詞が今回のテーマ（笑）特別な人のプレゼントは他のプレゼントに埋もれていてもすぐに解ってしまうんですね。言葉にしくなくても解っちゃうのは二人の絆が深いから・・・ということですよ。

6 深夜のメール（前書き）

佐藤さんのバースデーお祝い企画です！他の作品よりも短めですが、ラブラブな高佐をどうぞ召し上がれ！！

6 深夜のメール

日付変更線をまたいだ直後、机に置いた携帯が短い着信を告げた。どうやらメールが届いたらしい。ベッドに寝転び由美から借りたグルメ雑誌をめくっていた佐藤は短い溜め息を吐いた。むくりと起き上がり、卓上のそれを取り上げる。

何かあったのかしら

深夜だろうが早朝だろうが事件が起これば呼び出される。刑事という仕事をしているのだから当然の事だ。しかし、メールでの呼び出しという事はどうやら急を要するものでは無いらしい。それでも呼び出されれば行かない訳にはいかないだろう。

佐藤の足は自然にクローゼットへ向かう。歩きながら携帯のディスプレイを開く。新着メール1通と表示されているのを確認して、佐藤は届いたばかりのメールを開いた。

そこに現れた送信者の名前を見て、佐藤の顔に少女のような笑みが浮かぶ。ぴたりと足を止めるとくるりと踵を返し、先程まで寝転んでいたベッドへ向かう。ゆっくりとその縁に腰を下ろし、佐藤は弾む心を抑えながら本文を開く。

H A P P Y B I R T H D A Y

今夜うちでお祝いしませんか？

短い文章だったが佐藤の心は一気に満たされる。

今夜彼は夜勤の筈だ。きつと忙しい仕事の合間を縫って、日付が変わると同時に恋人の誕生日を祝うメールを送ってくれたのだろう。予想外のメールに驚きつつも、その気持ちが嬉しくて、佐藤の頬は自然に綻んだ。

「涉くんらしいな。」

その短いけれど思いやりに溢れた文章を何度も読み返し、佐藤はぽつりと呟いた。

暫く胸の奥から込み上げてくる喜びを噛み締めた後で、返事を返そうとした佐藤はふとあることに気づき、手を止める。どうやらこのメールにはまだ文章が続いているらしい。怪訝な顔でカーソルを下に移動させていくと、そこに再び短い文章が現れた。佐藤の頬がみるみる赤くなり、その顔に天使のように無垢な笑みが浮かぶ。

「馬鹿ね・・・カッコつけちゃって。」

言葉とは裏腹に愛おしむような口調で佐藤はぽつりと呟いた。佐藤の指がボタンを押し、ディスプレイに『保存しました』の文字が踊った。

最愛の美和へ
ありったけの愛を込めて

6 深夜のメール（後書き）

4月は佐藤さんのお誕生日があるという事で、前々から4月になったら書こうと心に決めていた佐藤さんバースデー企画のお話を書いてみました。ちょっと短めなんですけど、ラブ度は高めにしてみましたつもりです。楽しんで頂けたら嬉しいです♪

7・つがい（前書き）

今回はほのぼの高佐。佐藤さんに振り回されながらも決めるところは決める高木くん（毎度の事です……。）をご覧ください！

7・つがい

新緑の眩しい4月のある日、聞き込みに出ていた高木は都会の喧騒の隙間に愛らしいさえずりを聞いたような気がしてふと顔を上げた。真夏の焼き付くような陽射しとはまた違う、それでいて威力十分な春の陽射しに思わず目を細める。仰ぎ見た上空に一羽の鳥が旋回しているのを認め、高木の唇に微かな笑みが浮かんだ。

「高木くん、どうしたの？」

少し後ろを歩いていたら佐藤が突然立ち止まった高木に追い付き、不思議そうに尋ねる。高木は微笑を浮かべたままちらりとそちらに視線を向けると、青い空を指差した。

「佐藤さん、ほら、あそこ。」

左の手でひさしを作り、高木が示す先を見上げた佐藤はゆっくりと口元を綻ばせる。

「あれ、何て言う鳥かしら？」

視線を空に向けたままで佐藤が問う。

「あはは。名前までは分からないんですが・・・」

苦笑がちに答える高木に視線を戻し、くすりと微笑った佐藤が何かに気付き、再び視線を上げた。

「ねえ、あれ。」

今度は佐藤が上空を指差す。その指先を辿るように高木は視線を上げた。眉間に皺を寄せて目を細める高木の肩に、不意に佐藤の左手が掛かる。不用意に振り返れば触れてしまいそうなほど頬を寄せられて、高木の鼓動は一気に跳ね上がった。

「ほら、あそこだってば。」

焦れたように佐藤は一点を指差す。沸き上がる邪念を振り払い、高木はなんとかそちらに焦点を合わせる。

やっこの思いで視界に捉えた電線には、先程から上空を旋回しているのと同種の鳥がとまっていた。どうやら上空の鳥は、その鳥の周

囲を旋回しながら仕切にさえずっているらしい。それに応えるように、電線の上の鳥も愛らしい声で鳴く。

「つがいかしら？」

佐藤が高木に頬を寄せたままぼつりと呟く。

「かもしれませぬね。」

高木はこくりと頷いた。

やがて上空を旋回していた鳥が電線の上に舞い降り、二羽は身を寄せ合い仲睦まじくさえずり始めた。それを見ていた佐藤が高木の耳元に唇を寄せ、まるで内緒話でもするかのように囁いた。

「あの鳥達みたいに私達もずっと一緒に居られたらいいわね。」

「えっ。」

予想もしなかった言葉に驚いて思わず振り返る。佐藤のふんわりとした頬に僅かに高木の頬が触れた。

「馬鹿。急に振り向かないでよっ。」

頬を真つ赤に染めた佐藤が怒ったような瞳で高木を睨み付ける。

「あ、すみません。」

素直に謝ってから、高木は動揺を隠さない恋人の耳元にそっと囁いた。

「これからもずっとオレと一緒に居てくれますか？」

高木の問いには答えず、佐藤は唇に悪戯っぽい笑みを浮かべて問い返す。

「一緒に居てくれないの？」

問い返された高木は微かな苦笑を浮かべた。

「美和子さんさえ嫌でなければ。」

その少々意地悪な高木の答えに佐藤も僅かに苦笑する。

「もう。嫌なわけ無いでしょ。判ってるくせに。」

佐藤の答えを聞いた高木の顔に満面の笑みが浮かぶ。つられて佐藤も相好を崩した。高木は再び愛しい恋人の耳元に唇を寄せ、そっと囁く。

死ぬまでずっと傍に居ますよ。それがオレの望みですから。

7・つがい（後書き）

今回のテーマはほのぼの高佐。二人が交わすラブラブな会話にやりと笑って頂けたら嬉しいです♪

8 ・スキとキス（前書き）

なんだか無性に書きたくなって、一気に書いてしまいました（苦笑）
佐藤さん目線のちよっぴり大人な高佐ワールド。

8・スキとキス

彼のどこが好きかと聞かれたら、私はきつと困ってしまうだろう。それは決して悪い意味では無い。有りすぎて困ってしまうのだ。

彼の手も、声も、困ったような笑顔も全部好き。

少年のように無邪気な顔で笑われると胸がときめくし、顎に手を当てて考え込む仕草に我を忘れて見とれてしまったりもする。普段は人が良くてちよつと頼りない彼が、不意に見せる強引さや我が儘でさえも愛しいと思う自分がいた。

いつものように彼の部屋で談笑していた筈なのに、気付けば追い詰められていて。

背後に壁。前には彼。

退路を断たれ、両腕で逃げ道を塞がれた私は上目使いに彼を見上げた。

このまま素直に受け入れるべきか。それとも一度は拒むべきか。彼を見据えて考える。

そうして悩んでいる間にも、彼の大きな手が愛おしそうにそつと私の髪を梳く。長くて綺麗な指が頬を滑り降り、唇に触れた。

やっぱり駄目。

好きすぎる。熱を帯びた真剣な眼差しも、さらさら揺れる前髪も、シャツから覗く鎖骨のラインも。好きで好きで堪らない。この気持ちとは一体どこから溢れてくるのだろう。呆れるくらい私は彼が好きで。愛しくて愛しくて堪らない。そしていつだって私の本能は大好きな彼の愛で満たされる事を望んでいるのだ。

何度も唇をなぞる彼の指がもどかしくて、私は思わず瞳を閉じた。

大好きな彼の匂いに包まれ、大好きな彼の声で名前を呼ばれ、大好きな彼の唇で唇を塞がれる。

渉、大好きよ

甘く深いキスをくれる彼に應えながら、心の中で何度も叫ぶ。どんなに叫んでも、この想いの全てを彼に伝える事など到底できやしないけれど。それでも伝えたい。私がどれほど彼を愛しているのかを。言葉にならないこの想いを。

私の想いに應えるように、彼のキスは熱く、深くなっていく。もう言葉など必要なかった。今必要なのはこの愛を確かめ合う時間だけ。

渉。いつまでも私の傍に居てね。いつだって精一杯の愛であなたの想いに応えるから。

8 ・スキとキス（後書き）

何を思ったか無性にキスシーンが書きたくなりまして。ぱーっと勢いに任せて書いてしまいました。キスに至るまでの過程というか、心理みたいなモノを佐藤さん目線で。この佐藤さん、かなり情熱的です（苦笑）

9 ・おまじない（前書き）

ちよつと長くなりましたがこちらにアップしちやいます。前作に続く（？）高佐のキス3部作（勝手に命名）第2話をどうぞご堪能くださいませ！！

9・おまじない

新緑が眩しい5月のある日。

珍しく佐藤は仕事を休んで家に居た。非番なのではない。風邪をひいてしまったのだ。

朝起きるなり体中を鈍い痛みが襲った。一瞬筋肉痛かと思ったが直ぐにそうではない事に気付く。昨日はデスクワーク中心でたいした大捕物をやったのけた覚えはないし、多少無茶をしたところで筋肉痛になるようなやわな身体ではない。頬はのぼせそうなほど熱く火照っているのに手足はまるで蠟人形のようにひんやりと冷たいのも不思議で仕方がなかった。自分の身に起きている事がいまいち理解できないままりビングのドアを開け、母に指摘されて初めて佐藤は自分が熱を出している事に気付く。

39度7分。

なるほど、道理で体中が痛い訳だ。

納得すると同時に全身から力が抜けた。

不本意ながらも母の小言めいた進言を受け入れ仕事を休む事にして、佐藤は這うようにしてベッドに身を沈めた。節々の痛みが先程より幾分強くなったような気がする。見上げた天井はぼんやりと歪んでいた。

重症ね。

佐藤はゆっくりと瞳を閉じた。熱なんて出したのは久しぶりの事だ。ましてや寝込む程の高熱ともなれば尚更だ。思い返してみても、ここ数年こんな酷い熱にうなされたことは無い。朦朧とする意識の中で襲い来る痛みに耐えながら、いつの間にか佐藤はうとうとと浅い眠りに落ちていった。

喉の渇きで目が覚めて、反射的に机の上に視線を走らせる。当然の

如く机の上には先程放り投げた携帯くらいしか見当たらない。朝起きた時の事を思えば少しは楽になったものの、まだ身体中がだるい。とにかく動くのは億劫だった。佐藤は力の入らない身体に発破をかけ、出来る限り大きな声で叫んだ。

「おかーさん！」

しかし、いくら待っても母がやってくる気配は無い。声を張り上げもう一度叫んでみたが、結果は同じだった。

無意識のうちに深い溜め息が零れる。寝入る前に飲み物を持ってきておくべきだったとひとしきり後悔した後でなけなしの力を振り絞り、佐藤は何とかベッドから這い出した。

誰もいないリビングを横切り冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出す。コップに注いで一気に飲み干すと、心地良い爽快感と共にぶるりとひとつ悪寒が走った。

駄目。余計に熱上がりそ……

空いたコップに再び麦茶を注ぎ、部屋に戻ろうとしたその時。ピンポン

遠慮がちに玄関チャイムが鳴った。生憎現在この家には佐藤以外誰もいない。当然無視する事も出来たのだが、何か予感めいたものがあつたのだろうか。佐藤はコップをテーブルに置き、のろのろと玄関に向かった。

「はあい。」

満面に不機嫌を押し出したまま、佐藤はドアを開けた。

「あ、れ？美和子さん？」

そこには驚き顔の高木が立っていた。

「何か用？」

愛しい恋人が尋ねて来てくれた事に対して嬉しい気持ちは十分過ぎるほどあるのだが、なにぶん40度近い高熱を出している身だ。身体のだるさや痛みが先にたつて嬉しい顔というのが出て来ない。し

かし、そんな佐藤の態度を不快に思う様子もなく高木は申し訳なさそうな顔で答えた。

「いや、聞き込みで近くまで来たんでお見舞いに来たんですよ。お母さん、いないんですか？」

高木の問いに佐藤がこくと頷くのを見て、高木はますます申し訳なさそうな顔をする。

「すみません。熱出して寝込んでるって聞いて、心配だったんで。俯きがちに謝る高木に微かな笑みが漏れる。心配だったという言葉を高木の口から聞かされた事で、幾分身体の痛みも和らいだような気がした。

「上がってく？」

ぎこちない笑みを浮かべて尋ねる佐藤に高木は静かに首を横に振った。

「無理せずゆっくり休んでください。身体、辛いでしょう？」

自分の身体を気遣ってくれる恋人の優しい言葉に佐藤は素直に頷いた。

「これ、お見舞いです。美味しいかどうか分かりませんが。」

穏やかな笑みを浮かべた高木がビニール袋を差し出す。その口から佐藤の大好きな苺の艶やかな赤がちらりと覗いた。

「ありがと。」

佐藤がそれを受け取ると、

「早く良くなってくださいね。」

と言い残し、高木はくるりと踵を返す。その後ろ姿を見送ってドアを閉めようとした瞬間、

「美和子さん。」

不意に名前を呼ばれ、佐藤は再びドアを開けた。その隙間から高木が玄関に滑り込む。

「どうしたの？」

不思議顔で尋ねた佐藤の唇に、何の前触れもなく高木の唇が触れた。
「なっ！何？今の。」

さつきまでとはまた違った意味で頬がかあつと熱くなる。動揺を隠さない佐藤に高木は悪戯っぽい笑みを浮かべて答えた。

「おまじないですよ。はやく風邪が治るようにつて。」

まるで金魚のように口をぱくぱくさせて息を吸い、佐藤はやつとの思いで喉の奥から言葉を捻り出す。

「う、うつるわよ。」

何だか頭がくらくらする。それは多分熱のせいではないだろう。そんな佐藤の姿を可笑しそうに見つめながら、高木はそつと佐藤の髪を撫でた。

「良いですよ。人にうつした方が早く治るって言いますし。」

そういつて再び佐藤の頬にくちづけると、

「お大事に。」

短く別れを告げ、高木は優しい笑みを残してドアの向こうに消えた。

「馬鹿。」

呟いた佐藤の声はドアの閉まる音に掻き消えた。両の手で真っ赤に染まった頬を包み込む。腕にぶら下がったビニール袋から立ち上る甘酸っぱい香りが佐藤の鼻腔をくすぐった。

まだしばらく熱は下がりそうに無いわね。

小さく甘い溜め息を吐き、先程よりも少し軽い足取りで佐藤はリビングへ向かう。その唇には気付かぬうちに穏やかな微笑が浮かんでいた。

9 ・おまじない（後書き）

前作『スキとキス』を書き終えてから、キスをテーマに3部作くらいで短編を書いちゃおうと思いい立ちまして。今回はその第2弾に当たるお話を書いてみました。このお話の美和さんは前作と打って変わってかなり初々しいというか、可愛らしいですね（笑）さて、次話はどんなキスを書こうかしら？次話でとりあえずこの『キス3部作』はいったん完結です。（Bitter and Sweetはまだまだ連載続けますが・・・）お楽しみに！

10・オレスイッチ（前書き）

キス3部作の最後は高木くん目線の少し大人な独り語り。「スキとキス」の高木くんver.をどうぞっ！

10・オレスイッチ

甘えた声で名前を呼ばれたり、愛らしい笑顔で見つめられたり。それだけで、心臓は甘く疼く。気付けばスイッチはオンになっていて。溢れ出す愛しさが衝動となってオレの中を駆け抜ける。それは、何度経験しても持て余してしまうくらい激しく、甘い。そして、オレの中にあるそのスイッチを押すのはいつも彼女で。その発端はいっだって自分でも驚くほど些細な事なのだ。

「ねえ、渉くん。」

決して広くはないソファに並んで腰掛け、ぼーっとスポーツニユースを観ていたオレのシャツを引きながら、不意に彼女がオレの名前を呼んだ。

「ん？何すか？」

首を捻ったオレの視界に読んでいたタウン誌をちらつかせ、彼女は無邪気な顔でそれを指差す。

「これ、美味しそうじゃない？」

彼女が指差したのは、色とりどりのフルーツがあしらわれたケーキ。それは見るからに彼女好みな一品だった。

「この店、うちから割と近いですねえ。」

雑誌を覗き込みながらぼつりと呟いたオレの言葉に、彼女はこくと小さく頷いた。

「今度買って来てあげましょうか？」

恐らく彼女が期待しているであろうその言葉を口にした瞬間、彼女の顔にみるみる愛らしい笑みが広がる。

「ほんと？」

小首を傾げ、甘えた声で問い返すその仕草が余りにも可愛らしくて思わず笑ってしまう。ぱちり。

何かが音を立てて弾けた。無意識のうちに右手が延び、彼女の頬に触れた。

「涉くん？」

不思議そうに見上げてくる彼女が可愛くて堪らない。その唇に触れたいという衝動が、一気に沸き上がった。

触れてしまえば止まらなくなるのは解っている。それでもその衝動を抑える事が出来ない。指先が彼女の紅い唇に触れた。その感触を確かめるように、何度も何度も唇をなぞる。彼女はくすぐったそうに肩をすくめ、上目使いにオレを見上げた。ややあつて、その瞳が静かに閉じられる。

そつと顔を寄せ、唇でその温もりに触れる。愛しくて愛しくて堪らない。衝動がオレの中を駆け抜けた。

アイシテル……

言葉にならないくらいオレは彼女が好きで。どうしようもないくらい好きで。彼女がいらない世界なんて考えられない。触れ合うだけだったキスはやがて深くなり、甘酸っぱい愛しさだけが胸に込み上げる。

美和。ずっとずっと傍にいるよ。狂おしい程にその全てを愛しているから。

10・オレスイッチ（後書き）

やっと完結！キス3部作。最後は高木くんver.にしてみました。
キスに到るまでの過程を高木くん目線で。こういう高木くん、結構
好きなんですよねえ（笑）

11・紫陽花（前書き）

高木目線の独り言。甘さ控えめ。ラブラブ指数は低めですが、よろしければどうぞ。

11・紫陽花

蒸せ返るような暑さに思わずネクタイを緩めながら、高木は小さく溜め息を吐いた。先週から漸く関東地方も梅雨入りしたらしいが、地上には今日も穏やかな光が降り注いでいる。真夏程のきつい陽射しではないにしろ、降り注ぐ陽光は確実に気温を上昇させていく。雨が降る気配は一向に無いのだが、纏わり付くような不快な湿気が嫌でも梅雨を感じさせた。

「あつー・・・」

特別意識していた訳ではないが、自然と言葉が口を付く。額に滲んだ汗を手の甲で拭いながら、高木はふと天を仰いだ。青天の空にはぼつりぼつりとグレーの混じった白い雲が浮かぶ。

「今夜辺り、降るかもしれないな。」

それを見上げながら、高木はぼつりと呟いた。直後、高木は左手首の時計に視線を落とす。思った以上に予定の時間が差し迫っている事に驚いて、高木は足早に歩き出した。

約束の時刻からやや遅れて待ち合わせ場所に辿り着くと、そこには既に佐藤の姿が在った。急ぎ足で駆け寄る高木に気付いて、彼女はほんの少し笑顔を覗かせる。

「お疲れ様。何か進展はあった？」

劳いの言葉とともに、佐藤は凜とした眼差しで尋ねる。

「いえ。残念ながら・・・」

言葉少なに答える高木に、

「そう。まあガセネタじゃない事を信じて張り込むしか無いわね。」

佐藤は表情を変える事なく淡々とした口調で言った。

「そうですね。」

高木がこくりと頷くと、

「はい。これ。」

突然佐藤は持っていた包みを高木の目の前に差し出した。

「どうせたいしたものの食べてないんでしょう？」

差し出されたコンビ二袋からちらりと覗いたそれを見て、高木は申し訳なさそうに頭を下げる。

「あ、すみません・・・」

指先で頬を掻きながら自分より少し小柄な佐藤を見下ろすと、佐藤はにこりと笑みを浮かべた。その笑顔に先程まで張り詰めていた心がほっと緩む。

「早く食べちゃいなさいよ。あまり時間が無いんだから。空腹だと体、持たないわよ。」

ぶっきらぼうな口調ながらも自分を気遣ってくれる佐藤の優しさがひしひしと伝わってきて、高木の口元に自然と笑みが浮かんだ。

佐藤の言うように、朝から他の先輩刑事と張り込みに出ていた高木は食事らしい食事をしていなかった。下手に食事を取ると睡魔に襲われてしまうからだ。交代を終え、一息付く間もなく急いで佐藤との待ち合わせ場所にやってきた高木は確かに空腹だった。

「ありがとうございます。」

短く礼だけ言って高木はそれを受け取り、近くのベンチに腰を下ろす。袋から弁当とお茶のペットボトルを取り出すと、高木は早速箸を付けた。

今、どこかの店に入って食事を取っている余裕はない。事件の目撃者とのアポイントがあるからだ。それを考慮して佐藤は弁当を買っておいてくれたのだろう。そのさりげない心遣いが今の高木には物凄く有り難かった。

隣に腰を下ろした佐藤はペットボトルの蓋を開け、高木の横に置く。「そんなに慌てなくてもいいわよ。」

先程とは矛盾する台詞を苦笑混じりに呟いて、佐藤は上空の青を見上げた。その横顔が美しく、高木は思わず目を奪われる。

「なあに？どうしたの？」

それに気付いた佐藤が怪訝な顔でこちらを振り向いた。不意打ちを

くらってどきりと心臓が跳ねる。

「あ、いえ、その・・・」

あなたがあんまり綺麗だから見とれてました、なんてキザな台詞は言える筈も無く、高木は口ごもりながら視線をさ迷わせた。その視界に鮮やかな紫が飛び込んでくる。

「あ、紫陽花が・・・」

取り繕ったように呟いた高木の言葉に、佐藤はますます不思議そうな顔をする。

「紫陽花が綺麗だな、と思って。」

何とか言葉を捻り出し、高木は佐藤の後ろを指差した。その先を辿るようにして首を捻り、佐藤はぽつりと呟いた。

「ホント。綺麗・・・」

艶やかな紫色の紫陽花を眺める佐藤の微笑をこっそり眺めながら、高木は口には出せない台詞を心の中でそつと呟いた。

綺麗ですよ。どんなに美しい花よりも。あなたの笑顔の方がずっと。

11・紫陽花（後書き）

今回はいつもに比べて甘さ控えめです。たまにはこっぴつのも良いかと・・・いかがでしょう？

12・鼓動（前書き）

ご無沙汰しておりましてすみません。今回は佐藤さん目線のピュアなラブストーリー・・・になってる筈です。多分。

12・鼓動

この音を聞くとどうしてこんなにも心が安らぐのだろう。

果てしない不安に苛まれる時も。

途方もない恐怖に怯える時も。

その音は縮こまってしまった私の心をいとも簡単に救い上げ、まるで震える仔猫を撫でるかのように優しく包み込み、解きほぐしていく。

そして、その度に私はとてつもない安心感と幸福感を感じて満たされるのだ。

それはまるで穏やかな風のような。

正確に時を刻む秒針のような。

幼い頃に母の背中で聞いた子守唄のような。

そんな音。

殺伐としたこの世界でこれほどまでに優しく、力強い音を私は知らない。

それは闇に惑う私を光の射す方へと導いてくれるかけがえのない道標で。その美しい音色を奏でる彼は、私にとって唯一無二の存在なのだ。

「ねえ。」

彼の肩にこめかみを乗せ、ぴったりと身体をくっつけたまま、私は小さな声で呟いた。

「ん？なんすか？」

優しい声で答えながら、彼は不思議そうな顔で私を覗き込む。付き合い始めてもう随分経つ筈なのに、目があつた瞬間どきりと心臓が跳ねた。

「うっん。何でもない。」

短く答えて私は口元にささやかな苦笑を浮かべる。

こうやってただ肩を寄せ合い、寄り添っていられる事が幸せ過ぎて怖いなんて、贅沢過ぎる悩みを打ち明けるには少々気が引けた。そんな事を口にしたら、悪戯に彼を困らせるだけだと解っていたから。

「美和子さん？」

怪訝な顔で私を呼ぶ彼に、

「何でもないの。」

少しだけ顔を上げ、ぎこちない笑みを返す。

それでもまだ怪訝な表情を崩さない彼にこの些やかな不安を悟られたくなくて、私は彼の肩に頭を預けるようにして視線を逸らした。しかし、どうやら無意識のうちに彼の膝に置いていた手を強く握り締めていたらしい。ひとまわり大きな温かい手が、気付かぬうちに握り締めていた拳を包み、私ははっとして彼を見上げた。

「何でもないって事は無いでしょう？」

少し怒ったような口調で呟いた彼は、肩を抱く腕で力強く私の身体を引き寄せた。

「涉くん・・・？」

腕の中で呆然と呟く私の髪を撫でながら、先程とは違う優しい声が耳元でそつと囁いた。

「ずっと傍に居るから。」

途端に身体中から力が抜け、我慢していた訳ではないのに瞳から大粒の雫が零れ落ちた。

とくん・・・とくん・・・

静かで、それでいて力強い彼の鼓動が胸の奥で燦っていた不安をみるみる消し去っていく。

とくん・・・とくん・・・とくん・・・

心地良く響く鼓動に耳を澄ませながら、私は小さく頷いた。

「ずっと傍に居てね。」

そのたくましい生命いのちの音が続く限りずっと……

少しでも長くなった夜に愛しい彼の生命いのちを感じながら、私は静かに瞳を閉じた。

12・鼓動（後書き）

長らく更新ストップしておりませんでして申し訳ありません。今回は佐藤さん目線でピュアなラブストーリーを書いてみた・・・つもりです。最近気持치가ダークサイドに偏っていたせいか、なかなかこういうピュアな（ピュアなのか？）ラブストーリーが書けなくて・・・ここ2ヶ月ほどはずっとダークな高佐モノばかり書いておりましたので（こちらには掲載しておりませんが・・・）今回の作品がこの短編集のテーマに合うように書いているかどうかわかりませんが、楽しんでいただけたら嬉しいです。この作品をきっかけに、徐々にリハビリしていきなあと思っておりますので、よろしく願います。

番外編 2 ・甘い言葉にご用心（前書き）

またしても番外編です。今回は由美さん目線のラブコメ高佐。どうぞご賞味下さいませ。

番外編 2・甘い言葉にご用心

「やっと終わった・・・」

深い溜め息と共にぽつりと呟いて、彼は大きくひとつ伸びをした。

「お疲れ様。」

それに気付いた美和子が優しい声で隣席の彼を労う。

「はい、由美からの差し入れ。美味しいわよ。」

先程まで私に向けていたのとはまた違う、愛らしい笑みを浮かべた美和子は、食べかけの差し入れを机の上に置き、箱からひとつ包みを取り出すと、彼の前に差し出した。

本人は全く気付いていないけれど、美和子が彼に見せる笑顔は明らかに恋する乙女のそれで。いつもの凜とした彼女からは想像もつかないくらい柔らかく、愛らしく、無防備なのだ。それはもう、同性の私でさえ思わず見とれてしまうくらい可憐で。美和子が心底彼に惚れているのが良く判る。

だからこそ美和子に憧れている男達は皆、彼に嫉妬の炎を燃やすのだろう。

「あ、すみません。先に資料を返して来たいんで、置いてもらってもいいですか？」

席を立ち、机の上に積み上がった資料の山を手際よくまとめて抱え上げると、彼は申し訳なさそうな顔で美和子に問う。

「いいけど、戻って来た頃にはなくなってるかもしれないわよ。」

悪戯っぽく答えて手にした包みを大事そうに箱の隅に戻した美和子は、残っていた欠けらを摘み上げ、口に放り込もうとしてふと手を止めた。

「高木くん！」

何かを思い出したかのように彼の名を呼ぶと、

「ん？なんすか？」

足を止め、怪訝な顔で振り向いた彼に、美和子は真剣な顔で一言こ

う言った。

「あーんして。」

美和子の口から飛び出した予想外の言葉に、彼はもちろん周囲にいた誰もが呆気にとられて彼女を凝視した。

「へ？」

凍り付いた空気の中で漸く間抜けな声を漏らした彼に、美和子は急かすような口調で先程の言葉を繰り返す。

「ほら、早くあーんして。」

その声に圧されるように彼がぎこちなく口を開け、美和子は満足そうな顔で手にした欠けらを放り込んだ。

「ね。美味しいでしょ？」

無邪気な笑みで尋ねる美和子に、

「あ、はい・・・美味しいです。」

複雑な笑みで彼が答える。

次の瞬間、地鳴りのような怒号が広い部屋に響いた。

こりゃあ取調室連行決定ね・・・

「ご愁傷様♪」

ぽんと肩を叩くと、彼はジト目で私を見ながらぼつりと呟いた。

「由美さん。なんか・・・楽しんでないっすか？」

「そんなこと無いわよ。私は高木君に同情してあげてるの。ほら、早く資料返して来たら？まあ、当分戻って来ない方が身の為だと思うけど。」

にやける頬を無理矢理引き締めながら答えると、

「ですよね・・・」

彼はがつくりと肩を落とし、ささやかな溜め息を吐き出した。

「ん？何？どうしたの？」

事情が飲み込めず、きよんとする美和子に

「あ、いえ、何でもないっす。とりあえず行ってきます。」

苦笑混じりに答えた彼は、逃げるようにして部屋を出て行った。

「????」

怪訝な顔で首を傾げる鈍感な美和子の隣で、私は肩を震わせ笑いを噛み殺す。

美和子つては自分の事と色恋沙汰にはびっくりするほど鈍感なんだから・・・高木君も大変よね。

心の中で呟いて。

「高木君、よっぽど忙しいみたいねー。」

しれっとした顔で言いながら、まだ不思議そうな顔で首を捻っている親友をちらりと覗き見る。

「うん・・・」

何だか納得がいかないといった表情でこくりと頷く整った横顔を見つめながら、私はさっきの高木君と美和子が妬けるくらい絵になっていた事は絶対に教えてやらないと心に決めた。

番外編2・甘い言葉にご用心（後書き）

今回のネタ、完全に今週号と被りました（笑）前作『鼓動』を書き終えた後にふと思いついて書いていたのですが、まさかここまで見事に原作と被ってしまったとは・・・でもまあせつかなので番外編という形でアップさせていただきました。

こちらでも佐藤さんは自分が警視庁のアイドルである事には全く気付いておりません（笑）それ故、この後高木君にどんな災難が降り懸かるかも全く解っておりません。

作者はそんな鈍感な佐藤さんが大好きです♪

そして、そんな佐藤さんに振り回されてる高木君も大好きです♪

恐らく由美さんもそんな二人が可愛くて仕方ないんだと思います。

それにしても高木君はこの後『佐藤美和子絶対防衛線』の面々にどんな扱いを受けたんでしょうねえ（笑）

13・カaramelプリン（前書き）

今日、11月19日は高佐の日（勝手に命名・笑）
という訳で、今回は高佐の日記念SSです。

13・カaramelプリン

「ん？なあに？どうしたの？」

閉店間際の洋菓子店で高木が買って来てくれたプリンを頬張りながら、佐藤はただでさえ大きな瞳を更に大きく見開いた。

テーブルを挟んだ向かい側の彼のの前には、手付かずのプリン。

それと彼の間で視線を往復させながら、佐藤ははたと首を捻った。甘い物が苦手だというのなら話は解る。しかし、高木はその類では無い。特別好き、という訳ではないらしいが、仕事の合間にしばしば美味そうにチョコレートをつまんでいるくらいだから、嫌いでは無いのだ。

第一、本当に甘い物が苦手なら、わざわざ自分の分まで買って来るような事はしないだろう。

さっきまで、普通にご飯、食べてた筈なんだけどなあ……

どうにも腑に落ちなくて、佐藤は再び首を捻る。

「ねえ、どうしたの？具合悪い？」

テーブルに頬杖を付き、目を細めてこちらを見ている彼の顔を、心配そうに覗き込みながら、佐藤は表情を曇らせた。

「へ？ああ、いや別に……」

途端に彼の顔から先程までの穏やかな笑みが消え、代わりに困ったような笑みが浮かぶ。

眉間に皺を寄せ、ますます心配そうな表情になる佐藤に、高木はまるで独り言のようにぽつりとこつこつ呟いた。

「美和子さん、可愛いなあと思って。」

目が点になるというのは、まさしくこういう状態をいうのだろう。さらにと吐かれた予期せぬ台詞に、佐藤はぽかんと口を開け、幾度も瞳を瞬かせた。

この手の台詞は何度聞いても慣れる事が無い。

かあつと燃えるように頬が熱くなり、一気に心臓が暴れ出す。

「なっ！なんっ……何言ってる……」

動揺の余り、言葉が喉の奥に引つ掛かって上手く出て来ない。

そんな佐藤を面白そうに眺めながら、

「そういうところがまた、可愛いんですよね。」

からかうようにひとりごちて、高木はゆっくりと腰を上げた。

「な……何よっ！ちよっ……やだっ！来ないでっ！！」

イヤイヤをしながら身構える佐藤に苦笑しながら、高木はその隣に
すっと腰を下ろす。

まるで幼子にするように、その大きな手で、わしわしと佐藤の頭を
撫でる。

「そんな事で、ごまかされないんだからねっ。」

唇を尖らせ、上目使いに睨み付けた佐藤に、

「本当の事を言っただけですよ。」

悪びれる事無く高木は答えた。

先程まで頭を撫でていた手が、優しく髪を梳き、頬を撫でる。

その感触がくすぐったくて、佐藤はまるで子猫のように首を竦め、
瞳を細めた。

「そういう表情も、可愛いですよ。」

耳元でそつと囁いて。

高木はほのかな温もりで、佐藤の唇に触れた。

そのキスは、甘くてほろ苦い、カラメルプリンの味がした。

> i 3 4 9 3 — 5 7 9 <

13・カaramelプリン（後書き）

ダラダラと連載を続けてきたこの短編集も、今回で最終話です。
という訳で、最後話に相応しい（？）甘々高佐を書いてみました。

この短編集のタイトル『Bitter and Sweet』に引
つ掛けたラストにしてみたつもりですが、いかがでしたでしょうか？
少しでも高佐ファンの皆様に楽しんで頂けたら幸いです。

ちまちま更新にも関わらず、最後まで読んで下さった皆様、感想を
送って下さった皆様、そして、応援して下さい下さった皆様に、心から感
謝です！

有難うございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979g/>

Bitter and Sweet ～日常の風景～

2010年10月8日13時00分発行